釋迢空集

若山牧水

島木赤彦

齋藤茂吉

日本文学全集 16

筑摩書房

日本文学全集16　齋藤茂吉　若山牧水　島木赤彦　釋　迢空　集

昭和四十五年十一月一日発行

著　者　齋藤茂吉　若山牧水　島木赤彦　釋　迢空

発行者　竹之内静雄

発行所　株式会社筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一―七六五一（代表）
振替東京四一二三

本文整版　株式会社精興社
本文印刷　多田印刷株式会社
製本　株式会社鈴木製本所

齋藤茂吉集　目次

赤　光　五　立石寺の蟬　一三一
あらたま　抄　五五　最上川　一三四
白き山　抄　九三　ニイチェの病気　一三五
仏法僧鳥　一三六　齋藤茂吉之墓　一三九

島木赤彦集　目次

切　火　一四五　柿蔭集　一九一
氷　魚　抄　一六〇

若山牧水集　目次

死か芸術か　三一　黒　松　抄　二六一
山桜の歌　抄　二三四

釋迢空集　目次

春のことぶれ　二九三
古代感愛集　抄　三三五
死者の書　三六五
年譜　四四六
人と文学　山本健吉　四七三

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

齋藤茂吉集

ぶらさげて蝶を尼
きぞうつせみも
低きにゆきて山き
こえあき

茂吉

赤光

自明治三十八年
至明治四十二年

1　折に触れ　明治三十八年作

霜ふりて一もと立てる柿の木の柿はあはれに黒ずみにけり

浅草の仏つくりの前来れば少女まぼしく落日を見るも

書よみて賢くなれと戦場のわが兄は銭を呉れたまひたり

戦場の兄よりとどきし銭もちて泣き居たりけり涙おちつつ

馬屋のべにをだまきの花とぼしらにをりをり馬が尾を振りにけり

真夏日の畑のなかに我居りて戦ふ兄をおもひけるかな

はるばると母は戦を思ひたまふ桑の木の実の熟める畑に

たらちねの母の辺にゐてくろぐろと熟める桑の実を食ひにけるかな

熱いでて一夜寝しかばこの朝け梅のつぼみをつばらかに見つ

春風の吹くことはげし朝ぼらけ梅のつぼみは大きかりけり

桑畑の畑のめぐりに紫蘇生ひて断りて居ればにほひするかも

入りかかる日の赤きころニコライの側の坂をば下りて来にけり

寝て思へば夢の如かり山焼けて南の空はほの赤かりし

さ庭べの八重山吹の一枝散りしばらく見ねばみな散りにけり

数学のつもりになりて考へしに五目ならべに勝ちにけるかも

かたむく日すでに真赤くなりたりと物干に出でて欠せりけり

ゆふさりてランプともせばひと時は心静まりて何もせず居り

2　地獄極楽図　明治三十九年作

浄玻璃にあらはれにけり脇差を差して女をいぢめるところ

飯の中ゆとろとろと上る炎見てほそき炎口のおどろくところ

赤き池にひとりぽつちの真裸のをんな亡者の泣きゐるところ

いろいろの色の鬼ども集りて蓮の華にゆびさすところ

人の世に嘘をつきけるもろもろの亡者の舌を抜き居るところ

罪計に涙ながしてゐる亡者つみを計れば厳より重きにんげんは牛馬となり岩負ひて牛頭馬頭どもの追ひ行くところ

をさな児の積みし小石を打くづし紺いろの鬼見てゐるところ

もろもろは裸になれと衣剝ぐひとりの婆の口赤きところ

白き華しろくかがやき赤き華あかき光を放ちゐるところ

ゐるものは皆ありがたき顔をして雲ゆらゆらと下り来るところ

3　螢と蜻蛉　明治三十九年作

蚕の部屋に放ちし螢あかねさす昼なりしかば首すぢあかし

蚊帳のなかに放ちし螢夕さればおのれ光りて飛びそめにけり

あかときの草の露玉七いろにかがやきわたり蜻蛉うまれぬ

あかときの草に生れて蜻蛉はも未だ軟らかみ飛びがてぬかも

小田のみち赤羅ひく日はのぼりつつ生れし蜻蛉もかがやきにけり

4　折に触れて　明治三十九年作

来て見れば雪消の川べしろがねの柳ふふめり蕗の薹も咲けり（早春二首）

あづさゆみ春は寒けど日あたりのよろしき処つくづくし萌ゆ

生きて来し丈夫がおも赤くなり踊るを見れば嬉しくて泣かゆ（凱旋二首）

凱旋り来て今日のうたげに酒をのむ海のますらをに髯あらずけり

み仏の生れましの日と玉蓮をさな朱の葉池に浮くらし（仏生会二首）

み仏の御堂に垂るる藤なみの花のむらさき未だともしも

青玉のから松の芽はひさかたの天にむかひて竝びてを萌ゆ（若芽二首）

はるさめは天の乳かも落葉松の玉芽あまねくふくらみにけり

みちのくの仏の山のこごしこごし岩秀に立ちて汗ふきにけり（立石寺一首）

天の露おちくるなべに現し世の野べに山べに秋花咲けり

涅槃会をまかりて来れば雪つめる山の彼方に夕焼のすも

小滝まで行著きがてにくたびれし息づく坂よ山鳩のこゑ

夕ひかる里つ川水夏くさにかくるる処まろき山見ゆ

淡青の遠のむら山たび来つるわが目によしと寝つつ見にけり

火の山を繞る秋雲の八百雲をゆらに吹きまく天つ風かも（蔵王山五首）

岩の秀に立てばひさかたの天の川南に垂れてかがやきにけり

天なるや群がりめぐる高ぼしのいよいよ清し山高みかも

雲の中の蔵王の山は今もかもけだもの住まず石あかき山

あめなるや月読の山はだら牛うち臥すなして目に入りにけり

病癒えし君がにぎ面の髯あたり目にし浮びてうれしくてならず（蕨真氏病癒ゆ）

5　虫　明治四十年作

花につく赤小蜻蛉もゆふされば眠りにけらしこほろぎのこゑ

とほ世べの恋のあはれをこほろぎの語り部が夜々つぎかたりけり

月落ちてさ夜ほの暗く未だかも弥勒は出でず虫鳴けるかも

ヨルダンの河のほとりに虫鳴くと書に残りて年ふりにけり

てる月の清き夜ごろを蟋蟀やねもころころに率寝て鳴くらむ

きのふ見し千草もあらず虫の音も空に消入りうらさびにけり

あきの夜のさ庭に立てば土の虫音はほそほそと悲しらに鳴く

ながの月の秋ゑらぎ鳴くこほろぎに螻蛄も交りてよき月夜かも

6　雲　明治四十年作

かぎろひの夕べの空に八重なびく朱の旗ぐも遠にいざよふ

岩根ふみ天路をのぼる脚底ゆいかづちぐもの湧き巻きのぼる

蔵王の山はらにして目を放つ磐城の諸嶺くも湧ける見ゆ

底知らに瑠璃のただよふ天の門に凝れる白雲誰まつ白雲

岩ふみて吾立つやまの火の山に雲せまりくる五百つ白雲

遠ひとに吾恋ひ居れば久かたの天のたなぐもに鶴とびにけり

あめつちの寄り合ふきはみ晴れとほる高山の背に雲ひそむ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

見ゆ

八重山の八谷かぜ起る時のまや峡間みなぎりて雲たちわたる

たくひれのかけのよろしき妹が名の豊旗雲と誰がいひそめし

小旗ぐも大旗雲のなびかひに今し八尺の日は入らむとす

いなびかりふくめる雲のたたずまひ物ほしにのぼりつくづくと見つ

ひと国をはるかに遠き天ぐもの氷雲のほとり行くは何ぞも

雲に入る薬もがもと雲恋ひしもろこしの君は昔死にけり

ひむがしの天の八重垣しろがねと笹べり耀く渡津見の雲

7 苅しほ　明治四十年作

秋のひかり土にしみ照り苅しほに黄ばめる小田を馬の来る見ゆ

竹おほき山べの村の冬しづみ雪降らなくに寒に入りけり

ふゆの日のうすらに照れば竹群は寒々として霜しづくすも

窓の外に月照りしかば竹の葉のさやのふる舞あらはれにけり

霜の夜のさ夜のくだちに戸を押すや竹群が奥に朱の月みゆ

竹むらの影にむかひて琴ひかば清掻にしも弾くべかりけり

月あかきもみぢの山に小猿ども天つ領巾など欲りしてをらん

猿の子の目のくりくりを面白み日の入りがたをわがかへる

8 留守居　明治四十年作

まもりゐる縁の入日に飛びきたり蠅が手を揉むに笑ひけるかも

留守居して一人し居れば青光る蠅のあゆみをおもひ無に見し

留守をもるわれの机にえ少女のえ少男の蠅がゑらぎ舞ふかも

秋の日の畳の上に飛びあよむ蠅の行ひ見つつ留守すも

入日さすあかり障子は薔薇色にうすら匂ひて蠅一つ飛ぶ

事なくて見ゐる障子に赤とんぼかうべ動かす羽さへふるひ

まもりゐのあかり障子にうつりたる蜻蛉は去りて何も来ぬかも

留守もりて入日あかけれ紙ふくろ猫に冠せんとおもほえなくに

9　新年の歌　明治四十一年作

今しいま年の来るとひむがしの八百うづ潮に茜かがよふ

高ひかる日の母を恋ひ地の廻り廻り極まりて天新たなり

東海に殿馭盧生れていく継ぎの真日美はしく天明けにけり

ひむがしの朱の八重ぐもゆ斑駒に乗りて来らしも年の若子は

にひとしの真日のうるはしくれなゐを高きに上り目蔭して見つ

新装ふ日の大神の清明目を見まくと集ふ現しもろもろ

天明り年のきたるとくだかけの長鳴鳥がみな鳴けるかも

しだり尾の雞の雄鳥が鳴く声の野に遠音して年明けにけり

ひむがしの空押し晴るし守らへる大和島根に春立てるかも

うるはしと思ふ子ゆゑに命欲り夢のうつらと年明けにけり

沖つとりかもかもせむと初春にこころ問して見まくたぬしも

おほきみの大城の森の濃緑のいやとことはに年ほぐらしも

豊酒の屠蘇に吾ゑへば鬼子ども皆死しにけり赤き青きも

くれなゐの梅はよろしもあらたまの年の始に見ればよろしも

10　雑歌　明治四十一年作

あかときの畑の土のうるほひに散れる桐の花ふみて来にけり

青桐のしみみ広葉の葉かげよりゆふべの色はひろごるらしき

ひむがしのともしび二つこの宵も相寄らなくてふけわたるかな

うつそみのこの世のくにに春さりて山焼くるかも天の足夜を

ひさ方の天の赤瓊のにほひなし遙けきかもよ山焼くる火は

うつし世は一夏に入りて吾がこもる室の畳に蟻を見しかなり

真夏日の雲のみね天のひと方に夕退きにつつかがやきにけり

荒磯ねに八重寄る波のみだれたちいたぶる中の寂しさ思ふ

秋の夜の灯しづかに揺るる時しみじみわれは耳かきにけり

ほそほそとこほろぎ鳴くに壁にもたれ膝に手を組む秋の夜かも

旅ゆくと泉に下りて冷々に我が口そそぐ月くさのはな

11　塩原行　明治四十一年

晴れ透るあめ路の果てに赤城嶺の秋の色はも更け渡りけり

小筑波を朝を見しかば白雲の凝れるかかむり動くともせず

関屋いでて坂路になればちらりほらり染めたる木々が見えきたるかも

おり上り通り過がひしうま二つ遙かになりて尾を振るが見ゆ

山角にかへり見すれば歩み来し街道筋は細りてはるけし

馬車とどろ角を吹き吹き塩はらのもみづる山に分け入りにけり

山路わだ紅葉はふかく山たかくいよよ逼り来わがまなかひに

つぬさはふ岩間を垂るるいは水のさむざむとして土わけ行くも

とうとうと喇叭を吹けば塩はらの深染の山に馬車入りにけり

湯のやどのよるのねむりはもみぢ葉の夢など見つつねむりけるかも

夕ぐれの川べに立ちて落ちたぎつ流るる水におもひ入りたり

あかときを目ざめて居ればくだの音の近くに止みぬ馬車着けるらし

床ぬちにぬくまり居れば宿つ女が起きねと云へど起きがてぬかも

世のしほと言のたふとさ名に負へる塩はらの山色づきにけり

谷川の音をききつつ分け入れば一あしごとに山あざやけし

山深くひた入り見むと露じもに染みし紅葉を踏みつつぞ行く

三千尺の目下の極みかがよへる紅葉のそこに水たぎち見ゆ

かへりみる谷の紅葉の明らけく天にひびかふ山がはの鳴り

現し身が恋心なす水の鳴りもみぢの中に籠りて鳴るも

山川のたぎちのどよみ耳底にかそけくなりて峰を越えつも

ふみて入るもみぢが奥は横はる朽ち木の下を水ゆく音す

山がはの水のいきほひ大岩にせまりきはまり音とどろくも

うつそみは常なけれども山川に映ゆる紅葉をうれしみにけり

うつし身の稀らにかよふ秋やまに親しみて鳴く蟋蟀のこゑ

打ちわたす山の雑木の黄にもみぢ明るき峡に道入りにけり

もみぢ原ゆふぐれしづむ蟋蟀はこの寂しさに堪へて鳴くなり

つかれより美し夢に入る如き思ひぞ吾がする蟋蟀のこゑ

もみぢ照りあかるき中に我が心空しくなりてしまし居りけり

しほ原の湯の出でどころとめ来ればもみぢの赤き処なりけり

山の湯のみなもとどころ鉄色にさびにけるかな草もおひなく

鉄さびし湯の源のさ流に蟹がいくつも死にて居たりし

あまつ日は山のいただきを照らしたりふかき峡間の道のつゆじも

親馬にあまえつつ来る仔馬にし心動きて過ぎがてにせり

あしびきの山のはざまの西開き遠くれなゐに夕焼くる見ゆ

橋のべのちひさ楓かへり路になかくれなゐと染めて居りけり

天地のなしのまにまに寄り合へる貝の石あはれとことはにして

ほり出すいはほのひまの貝の石ただ珍らしみありがてぬかも

おくやまの深き岩間ゆ海つもの石と成り出づ君に恋ふるとき

もみぢばの過ぎしを思ひ繁き世に生きつるなべに悲しみにけり

山峡のもみぢに深く相こもりほれ果てなむか峡のもみぢにも

もみぢ斑の山の真洞に雲おり来雲はをとめの領巾漏らし米

火に見ゆる玉手の動き少女らは何に天降りてもみぢをか焚く

天そそる白くもが上のいかし山夜見の国さび月かたむきぬ

まぼろしにもの恋ひ来れば山川の鳴る谷際に月満てりけり

12　折に触れて　明治四十二年作

潮沫のはかなくあらばもろ共にいづべの方にほろびてゆかむ

やうらくの珠はかなしと歎かひし女のこころうつらさびしも

宵あさくひとり籠ればうらがなし雨蛙ひとつかいかいと鳴くも

をさな妻こころに守り更けしづむ灯火の虫を殺してゐたりかがまりて見つつかなしもしみじみと水湧き居れば砂うごくかな

夏晴れのさ庭の木かげ梅の実のつぶらの影もさゆらぎて居り

春闌けし山峡の湯にしづ籠り楤の芽食しつつひとを思はず

馬に乗り湯どころ来つつ白梅のととのふ春にあひにけるかも

ひとり居て卵うでつつたぎる湯にうごく卵を見ればうれしも

干柿を弟の子に呉れ居れば淡々と思ひいづることあり

ゆふぐれのほどろ雪路をかうべ垂れ濡れたる靴をはきて行くかも

世のなかの憂苦も知らぬ女わらはの泣くことはあり涙ながして

春の風ほがらに吹けばひさかたの天の高低に凧が浮べり

萱ざうの小さき萌を見てをれば胸のあたりがうれしくなりぬ

青山の町かげの田の畔みちをそぞろに来つれ春あさみかも

春あさき小田の朝道あかあかと金気浮く水にかぎろひのたつ

明けがたに近き夜さまのおのづから我心にし触るらく思ほ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com